

長距離ドライバー 「週休2日」に驚く

欧州視察研修を振り返る



埼玉協 桶本副会長

【埼玉】埼玉協（横塚正秋会長）が1月29日から2月5日の8日間の日程で実施された第4回海外視察では、ドイツ、フランス、イギリスの3か国を回った。「安全対策」「環境対策」「魅力ある職場作り」「異文化交流」を目的に、地元トラックターミナルや陸上運送連盟などを視察したが、团长として参加者

18人をまとめた副会長桶本毅氏に、研修を振り返ってもらった。

◇ 過去に3回、海外研修を実施しているが。「第1回は、平成8年にアメリカに行った。規制緩和の現状を見るためだったが、全米トラック協会の副会長と面談するなど、密度の濃い視察となった。第2回は、環境先

進国の現状を見ようと、同11年にオランダ、イタリア、ドイツ、フランスの4か国を回った。第3回は、ヨーロッパの高速道路事情を学びに、同17年にオランダ、ドイツを回った」行程を振り返って。

「前回は、すべてバスで移動したが、今回は、すべて鉄道移動にした。8日間で鉄道を乗り継ぎ、3か国を回るといふタイトなスケジュールで、観光名所もほとんど見れず、参加者はかなりきつかったと思うが、成果は得られたと感じている」

環境先進国といわれるヨーロッパの取り組みは。「環境税が導入され

ており、イギリスではパークアンドライドも進んでいた。ドイツでは、トラックは土日の走行を禁止し、環境対策を行っていた」労働力確保について

「ドイツのある運送会社は、長距離のトレーラードライバーが週休2日で勤務している」と聞いて、そんなことが可能なのが驚いた」

具体的には。「例えば、5000キロ先の取引先へ配送する際、半分の2500キロ地点に中継拠点を構え、そこに出發地へ配送するコンテナをあらかじめ準備しておく。ドライバーは、そこでコンテナを積み替えて、また出發地に戻る。そうすれば1日の走行が500キロ、労働時間もオーバーすることはない。中継拠点から出發するドライバーは、同じように2500キロ先の取引先へ配送するが、そこでも出發地行きのコンテナが準備されており、それを載せ替えて帰ってくるという仕組みだ」

運賃をそれなりにもっているからできるのでは。「運賃は決して高くはない。その代わり、コンテナを通常よりも多く積めるように、ヘッドの数を減らし効率化を図り、1台あたりの生産効率を上げていた。大手ではなく、中小規模の運送会社が取り組んでいた点が非常に興味深かった」

日本でもできるのか。「道路事情などの問題もあり、かなり難しいと予想されるが、もしそれができるようになれば、日本でも長距離ドライバーの週休2日が可能になるのではないか」

今回の視察研修を振り返って。「ヨーロッパも環境規制や少子高齢化の問題は深刻で、日本のそれ以上かもしれない。しかし、事業者や業界がしっかりと工夫を凝らしている。我々も自助努力が必要だと感じた」（高田直樹）